

アメリカの大学は、基本のシステムにおいては世界一だと言われている。ところが近年、研究第一主義が形骸化し出世主義に席巻されてしまった。博士号のインフレ、意味のない研究のほめあいによる嘘の名譽。それに忙しな学生への講義はまったくないがしろにされる教育。仲間受け用の研究のためには仲間の動向ばかりを見ているからだ。ハーヴァードでは授業に人気のある若手教員は意図的に外に追い出されるし、加大バークレーでは三〇％の女子学生が教授からセクハラをされているが、教授団はお互いを守りあっている。ほめあい共同体ではその数が重要だからだ。ダートマス大では教授の差別的な態度を告発した学内新聞の記者を退学処分にした。なんと黒人のこの教授は、女子学生記者の部屋まで押し掛けてきて怒鳴り散らしたが、おとがめは怒鳴られたほうに下った。その他、あるいはあるは、アメリカでも象牙の塔となっ

民族の復讐 新しい世界観の構想

アメリカの冷戦研究者として知られるジョン・ルイス・ギャデイスは、戦後の東西冷戦体制を「長い平和」ととらえていたけれど、冷戦の終焉とともに世界は局地的紛争の終わりになき連続の観を呈している。ボスニア・ヘルツェゴヴィナやアゼルバイジャン等の現実が示すように、至るところで「民族の復讐」が始まったのだ。

これらの事例は、「二つの例外なのか一つの先例なのか」。アメリカが力を喪失して移民国

家としての脆さに悩み、旧ソ連がブラックホールと化し、イスラム原理主義が世界各地に興隆し、貧しい諸国の民族主義が台頭するという混沌のなかで、二十一世紀の民族国家（エタ・ナシオン）はどうあるべきか。あまりにも長いあいだ世界の大問題に素知らぬ顔で偽善的態度をとりつけてきたフランスは、このままでよいのか。

戦後生まれのフランス知識人にして豊富な学識と奇抜な発想、そして巧みな論争のレトリ



アラン・マンク著

仏の知識人による知的な刺激

ツクで、次々に話題を投げかけてきたアラン・マンクの発言は、「民族の復讐」という今日の状況をいち早く予測していただけに、見逃せない。

著者は、民族主義が時流の環境保護主義やポピュリズムと結びつく「エコロ・ナシオナロ・ポピュリズム」の危険性に強い警告を発し、他方では、日独両経済超大国が再び世界を支配するのではないかと危ぶんでいる。特に日本に対しては「帝国主義的寡頭体制」の再来だと厳しく、「これほどの技術大国に

とつては、核兵器の製造など兎に等しいが、東京はいかなる瞬間に、安全保障のために核兵器を保有せねばならないと感じることになるのだろうか？ いつ力の至上命令が広島と長崎のしるしことになるのだろうか？」とささ述べている。

この日本観はあまりにも極端だが、市場経済の拡大が「民族の復讐」を容認する方向に世界は向かうべきかという結論には救われた。知的刺激に充ちた書である。――山本一郎訳

（新評論・三六〇五円）

カリフォルニア大サン

ディエゴ校大学院客員教授

中嶋雄雄



C・J・サイクス著

教授たちのお粗末な生態暴露

る。仲間受け研究の典型にラゲと記号論があげられているあたり、見過ごせない記述である。

パワーが足りないだけ陰湿な日本の大学の例を著者が知らなかったのは、われわれにとって幸運としか言いようがない。この本がアメリカで勇気ある書として受け入れられていることを知れば、そこからさらに三流の大学を誘致して村起こしという

「発展」の結果、学部レベルがひどく下がったのも一因ではないかという疑問も湧くし、アーカンサスとかアーバナ大学イリノイ校等と表記するとき訳上の初歩的ミスは原著の重要性を大いに欠くのではとも思われる。だが、大学人と関係官僚必読である。――長沢光男訳

（化学同人・二八八四円）

経済人類学者 栗本慎一郎

た。その証拠に上京直後には「いそべ」という姓で、戸籍操作した疑いがある、というようにマンガの裏を讀みとるのである。

長谷川町子の一家は昭和七年（一九三二）、福岡時代に父親を亡くした。母親は「一年間泣きくらしたあけく、ガバとはねおき」（『サザエさん』）とあけられて東京へ出たのである。上京の験を作者が無結果だとう。裁的「な存在」この女系家族生き抜いた。サザエさん格が濃く反映カメは町子と代後半には、草がカツオのようになり

産経新聞